

活動報告

イギリスの障害者スポーツ視察報告

A report on Para-sports in UK

藤田 紀昭 三井 利仁 安藤 佳代子 兒玉 友

Motoaki FUJITA, Toshihito MITSUI, Kayoko ANDO, Yu KODAMA

日本福祉大学 スポーツ科学部

Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University

1. はじめに

2018年2月16日から22日までイギリスの障害者スポーツ関連施設を視察してきた。旅程は表1に示すとおりである。視察の目的は2012年ロンドンオリンピック・パラリンピック後の大会会場(Queen Elizabeth II Olympic Park:以降オリンピックパークとする)の利用について、パラリンピック発祥の地であるStoke Mandeville Stadium Guttman Centre(以降ストーク・マンデビル・スタジアムとする)の実態、Loughborough University(以降ラフバラ大学とする)における障害者スポーツ研究施設状況、The University of Worcester(以降ウースター大学とする)の障害者スポーツ関連授業運営等について明らかにすることである。ウースター大学では、大学を視察するとともに、日本の障害者スポーツ振興施策、オリンピック・パラリンピック教育の現状、日本福祉大学スポーツ科学部の紹介、脊髄損傷者のパフォーマンスに関する研究報告を行った。その後のディスカッションで大学間連携の可能性についても意見交換した。なお視察者が本学を紹介した時の発表資料を本稿の最後に付した。

視察には日本福祉大学スポーツ科学部教員、藤田紀昭、三井利仁、安藤佳代子、兒玉友の4名が参加

し、学内の重点研究「大学を拠点とした障害者スポーツの普及、選手育成のあり方に関する研究」の一環として実施した。

本報告のうち、オリンピックパークに関しては安藤が、ストーク・マンデビル・スタジアムに関しては兒玉が、ラフバラ大学に関しては三井が、そしてウースター大学に関しては藤田が担当した。

2. オリンピックパークについて

2-1. ロンドン大会のレガシー

2012年にロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会(以降ロンドン大会)が開催された。ロンドン大会は、オリンピック史上初めてレガシープランが招致段階から公式に義務づけられた大会である。そのメイン会場エリアであったオリンピックパークは、ロンドン大会のレガシーの象徴であり、地域住民から世界中の人々が集まるエリアとなっている。

2007年に発表されたロンドン大会における「レガシー・アクションプラン」は、イギリスのスポーツ大国化、ロンドン東部の変革、若者世代の鼓舞、オリンピックパークの「持続可能な生活」のモデル化、イギリスが「居住・訪問・ビジネス」の面で創造的・包摂的で人々を歓迎する場であることを内外に示す、という5つの目標が掲げられた

表1 英国障害者スポーツ関連施設視察日程

日付	視察先	視察内容
2/16	出国	中部国際空港を出発、ヒースロー空港到着 ロンドン市内（ホテル）へ移動
2/17	Queen Elizabeth II Olympic Park	2012ロンドンパラリンピック以降のレガシーの1つで あるオリンピックパークを視察
2/18	Stoke Mandeville Hospital Stoke Mandeville Stadium Guttmann Centre	パラリンピック発祥の地、現在も地域のスポーツ活動 の中心となっているストークマンデビル病院、スタジ アムの視察
2/19	Loughborough University	ラフバラ大学にて地域における障害者スポーツ支援に ついて視察及び聞き取り
2/20	University of Worcester	ウースター大学にて、学部カリキュラム・実習等につ いて調査及び本学スポーツ科学部の現状を報告
2/21	帰国	ヒースロー空港から出発（機内泊）
2/22	帰国	中部国際空港に到着

(杉山ら, 2016). その後のレガシー戦略の実施プロセスとしては, 大会開催前においては環境への配慮を中心に会場エリアの開発が行われ, 大会期間中は「Inspire a generation」をスローガンとして掲げ, 若者世代へのスポーツ・文化活動・地域ボランティアなどの積極的参加を促した. そして大会開催後は, 居住・訪問・ビジネスの場としてロンドン東部の再開発が現在も進められている.

今回視察したオリンピックパークは, ロンドン東部のストラットフォード地区に位置し, 再開発が進むエリアとなる. ロンドン大会後に, 2012年エリザベス女王即位60年を記念してクイーン・エリザベス・オリンピックパーク (Queen Elizabeth II Olympic Park) として名付けられた. ロンドンレガシー開発公社 (London Legacy Development Corporation) は, 2012年4月に設立しロンドン東部地区の再開発, 大会後の施設再利用, 撤去等の責任を担うことになり, このオリンピックパークを含めた地域の再開発が現在も行われている. オリンピックパークの開発には, 教育 (Education), 事業 (Enterprise), 雇用 (Employment), 環境 (Environment) の4つのEがキーワードとして推進され, ロンドン大会でIBC/MPCとして使用さ

れた建物は, ヒア・イースト (Here East) と呼ばれるロンドン東部の新たなイノベーターやデジタル企業家の拠点として再生され, スポーツ専門放送局のBT Sportのスタジオ・放送設備や, ラフバラ大学ロンドンキャンパスなどが設置されている. さらに, オリンピックパークのエリアには, イギリス国内外を結ぶ鉄道が5本以上も通る交通拠点であり, 巨大ショッピングモールがあるウエストフィールド・ストラットフォードシティが併設され, 選手村の跡地の集合住宅により住宅供給とコミュニティ形成が進められている. また, その周辺地域には企業のオフィス誘致が進められていることから, 今後もさらなる発展のある地域となるだろう.

2-2. オリンピックパーク視察

筆者らは2018年2月16日の夜にヒースロー空港へ到着, その日はロンドン市内に宿泊をし, 翌朝17日にオリンピックパークを視察した. ロンドン市内からのアクセスもしやすく, 視察日が土曜日ということもあり多くの人々がオリンピックパークへ向かっていた.

オリンピックパーク入口にあるインフォメーションが開くと同時に訪ねると, ボランティアの方が声

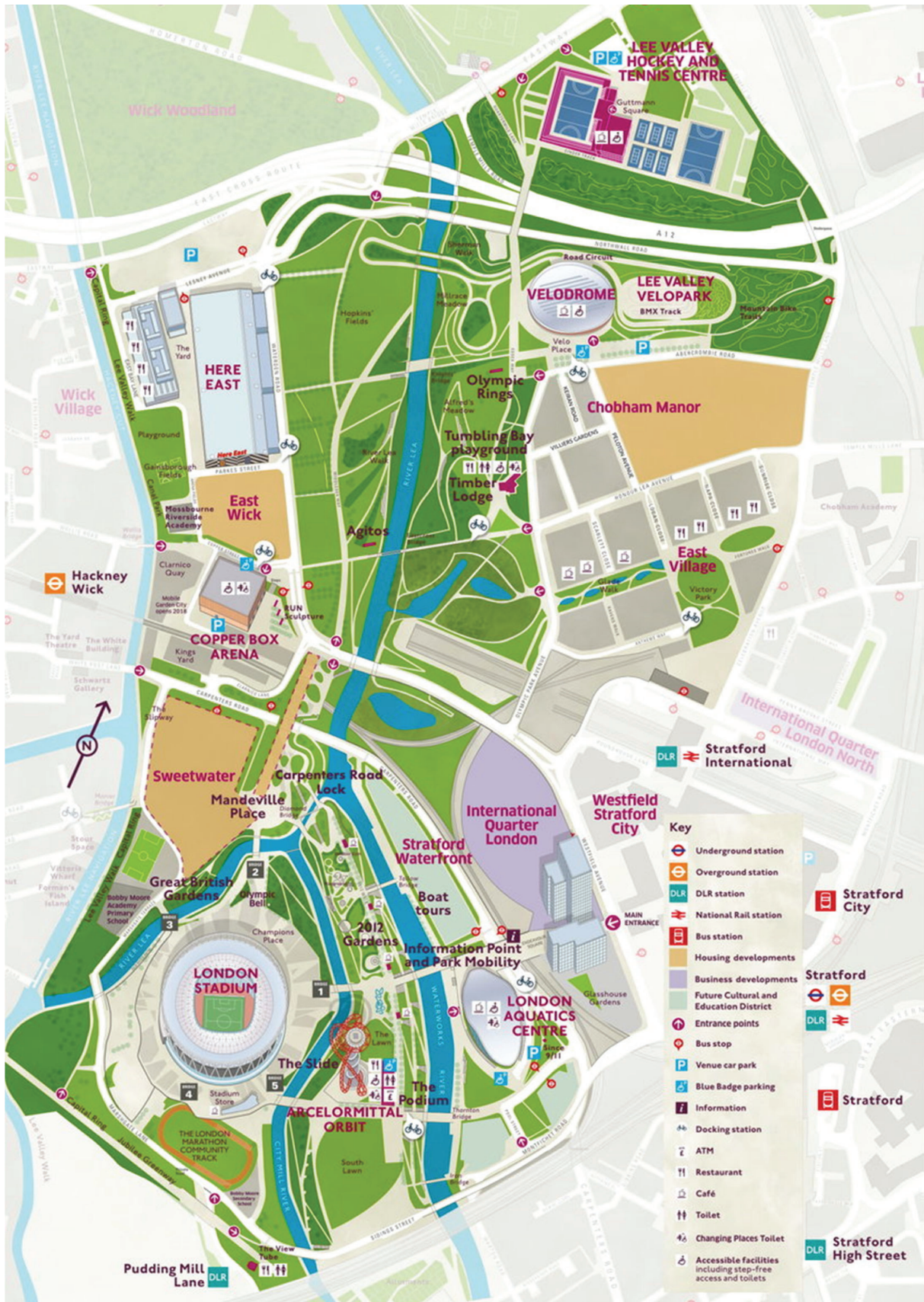


図1 Park Map

<http://www.queenelizabetholympicpark.co.uk/the-park/plan-your-visit/park-map>

を掛けて下さり、カートに乗ってオリンピック内を案内してくれるとのことになった。オリンピックパークの面積は、2.5平方キロメートルあり、パークを含めた再開発地域の総面積は、7平方キロメートルにもなることから、カートで回ってくれるサービスをしているとのことであった。案内してくれたボランティアのお二人は、ロンドン大会でのボランティア経験者で、インフォメーションを担当しているメンバーの多くは、大会ボランティア経験者という。



写真1 インフォメーション前



写真2 入口からメインスタジアムへの道

インフォメーションからロンドン大会時のメインスタジアム（現在はロンドンスタジアム、以降ロンドンスタジアム）へ向かう道には、ロンドン大会の形跡が間隔をあけて直線状に記されており、観客数やボランティア数、報道関係者数などが書かれていた。その日はロンドンスタジアムでのイベントは開催されていなかったが、ロンドン大会後も数多くの

大会が開催されている。ロンドンスタジアムで昨年行われた「世界パラ陸上競技選手権大会ロンドン2017」では、10日間の日程で行われた大会のチケットセールスは約28万枚という（吉田，2017）。当時、大会にスタッフとして参加していた視察者（三井）によると、競技前に映像にクラス分けが映し出され観客が分かりやすい工夫がされていたことや、観客もスポーツを楽しむ様子であったことなどがあげられていた。そのロンドンスタジアム横には、数多くの障害者用駐車場が設置され、障害がある方もオリンピックパークへは乗用車でも公共交通機関（電車・バス）でもアクセスしやすい環境であった。



写真3 スタジアム横の障害者用駐車場

オリンピックパークの地域は、かつて重化学工場などが立ち並んでいた工場地帯だった。ロンドン大会の開催がきまり、化学物質などにより汚染された土壌は、最新技術を用いた土壌洗浄装置の導入などにより大規模な土壌改良が行われ、全ての土壌を洗浄して大会が実施された。河川においても同様に再生され、オリンピックパークの河川敷には30万本の湿地植物が植えられ、英国産樹木4,000本が植林された。オリンピックパーク内のおよそ40%が緑地という。また、パーク内にあるリー川には、35本の橋によって回遊性を持たせた作りとなっており、ウォーキングやジョギングを楽しむことができる。視察時は2月ということもあり、花は見られなかったが、カートに乗りながらパーク内のイングリッシュガーデンや河川の水の浄化の工夫などについても、



写真4 ロンドン大会のシンボルタワー
「アルセロール・ミッタル・オービット」



写真6 マンデビル・プレイス前の点字付き掲示板

ボランティアから説明をしていただいた。

ロンドン大会のシンボルタワーである「アルセロール・ミッタル・オービット (ArcelorMittal Orbit)」は、視察時には展望台の他に、アトラクション施設としてスライダーが設置されていた。また、その前には表彰台があり、モニュメントを背景に写真が撮れるような場所となっており、親子で記念撮影をされている方も多くみられた。

今回の視察で一番訪れたかったエリアの1つは、「マンデビル・プレイス (Madeville Place)」である。マンデビル・プレイスは、ロンドンスタジアムの北に位置し、ロンドン大会でのパラリンピック大成功を称えるために作られたエリアである。これまで開催されたパラリンピック大会の歴史の中でロンドン大会での参加国数、選手数、観客数の増加が、パラリンピックを新しいレベルに導いたこと、また



写真7 パーク内のパラリンピックシンボル



写真5 マンデビル・プレイス

Paralympics GB をヒーローにして、障害の見方を変えたことも大会成功の要因としている。マンデビル・プレイスには、リンゴの樹が植えられている。これは、ロンドン大会でのパラリンピック開会式で使用されたリンゴのテーマからインスピレーションを得て、リンゴの樹が植えられたのであるが、そこに植えられている樹は Paralympics GB チームの金メダルを獲得したすべてのメンバーの出身地のリンゴの樹であるという。また、そこから新種のリンゴが作られ、その名前を「Paradise Gold」とコンペティションで決められた。それは、ロンドンでオリンピック・パラリンピック教育プログラムとして実施されている Get Set として、小学生より募集して決められたものである。パラダイス (PARADICE) の意味は、Para (Paralympian), D (Det

ermination), I (Inspiration), C (Courage), E (Equality) と、パラリンピックの価値が含まれている。このエリアについても他の施設と同じようにイベントが開催され、このスペースを楽しみ、パラリンピックの価値の影響について考えてもらえるようなメッセージが込められていた。

オリンピックパークを含む、ロンドン東部地域はまだ開発段階ではあるが、ロンドン大会時から大きく異なる状況であり、選手村から集合住宅に変更され、コミュニティの形成が進められていることが理解できたことと、オリンピックパークまでのアクセスが非常に便利であることから、企業の進出が進むことも計画されていることが理解できた。今回の視察を通じて、ロンドン大会のレガシー戦略の中で注目されている大会後のオリンピックパークについて、「居住・訪問・ビジネス」の面から様々な取り組みがなされていることを視察することができた。今後、植えられた樹木が大きくなるころにまた訪れてみたいと考えている。

3. ストーク・マンデビル・スタジアムについて

筆者らは2018年2月18日、パラリンピック発祥の地とされるストーク・マンデビル病院及びストーク・マンデビル・スタジアムを視察した。病院の前には、オリンピックパーク同様、パラリンピックのシンボルが掲げられていた。また、パラリンピック

の父と呼ばれるルードウィッヒ・グットマン医師の銅像があった。ストーク・マンデビル病院は1944年、院内に国内初の脊髄損傷リハビリテーションセンターを設立し、その後、ストーク・マンデビル・スタジアムが設立された。

3-1. ストーク・マンデビル・スタジアムの概要

ストーク・マンデビル・スタジアムは、障害のある人のためのスポーツの国際的な中心地として1969年に設立され、体育館、プール、陸上競技場、フィットネスセンター、テニスコートなどが設備されている。また、大会やイベントに参加する人が宿泊可能なオリンピック・ロッジがある。



写真9 ストーク・マンデビル・スタジアム入口



写真8 ルードウィッヒ・グットマン医師の銅像



写真10 アーチェリー教室の様子



写真11 フィットネスセンター内の様子



写真12 陸上競技場

スタジアム内では、アーチェリー、車いすバスケットボール、ポッチャ、車いすラグビー、ゴールボール、シッティングバレーボールなど様々な障害者スポーツを実施している。筆者らが視察した折には、体育館でアーチェリーが行われていた。年齢は10代から60代と幅広く、パラリンピック出場や仲間と楽しむことなどを目的として参加していた。

フィットネスセンターでは、ヨガ、サーキットトレーニング、ステップなどを実施している。センター内を歩くと、歩道が広く確保されており、車いすに乗ったまま利用できるマシンが多く揃っていた。

障害のある人のために設立されたスタジアムだが、近年は健全者と障害者の交流を図りつつ、地域に開かれたスポーツ施設として認知度を高めている。また、障害のある人の多くが肢体不自由者である。

3-2. ウィールパワー

ウィールパワー (WheelPower) は、ストーク・マンデビル・スタジアムを拠点とし、1972年、「英国対麻痺者スポーツ協会 (British Paraplegic Sports Society)」として設立され身体障害者のためのスポーツの機会を提供してきた。

具体的には、隣接するストーク・マンデビル病院を含む6つの脊髄損傷リハビリテーションセンターにカウンセラーやウィールパワーの会員を派遣し、カウンセリング等を通して、退院後に居住地で実施できるスポーツ等に関する情報支援を行っている。つまりリハビリが終了し地域に戻った後も、継続的にスポーツやレクリエーションを行う機会を提供しているということになる。

日本においては、リハビリテーションセンターの所管は厚生労働省である。リハビリを終えた人に対し、スポーツやレクリエーションを楽しむ機会を提供するためには、スポーツを所管する文部科学省との連携を図ることが重要であると考えられる。

3-3. 各種イベント

ストーク・マンデビル・スタジアムでは、障害者スポーツ教室やフィットネスセンター等でのプログラム以外にも様々なイベント等を実施している。

キャンプ

障害の種類や程度、ライフステージに応じて対象者を設定している。内容は、例えば、ポッチャ、車いすバスケットボール、フェンシングなど様々な障害者スポーツを体験できる1日キャンププログラムなどが行われている。

ジュニア・ゲーム

12歳から18歳までの身体障害のある子どもを対象に、4日間、アーチェリー、陸上競技、ハンドサイクリング、パワーリフティングなど様々な障害者スポーツを行っている。子ども同士の交流を深めること等を目的としている。

70周年記念イベント

1948年、ストーク・マンデビル病院の一角で、第1回ストーク・マンデビル競技大会が行われ2018年で70年となることを記念したイベントがス

トーク・マンデビル・スタジアムで行われた。イベントは7日間行われ、障害の有無にかかわらず多くの人々が参加した。イベント内容は、例えば、5歳から18歳を対象としたポッチャ、8歳から16歳を対象としたシッティングバレーボール、誰でも参加可能としたファミリーフットボールなどであった。70周年記念イベントを除けば、どのイベントも身体障害児・者を対象としていた。

4. ラフバラ大学訪問について

筆者らは2018年2月17日夕方にラフバラに入り、その夜はラフバラ大 School of Sport, Exercise and Health Sciences のヤン博士 (Dr. Jan Van-Der-Scheer) と夕食を共にした。翌18日、早朝よりクリストフ博士 (Dr. Christof Leicht) の案内で大学を視察し、説明を受けた。ラフバラ大学はロンドンオリンピックでの日本の事前合宿地として提携関

係を結び、世界有数のスポーツ施設を有しており、また、2014年、タイムズにより Sports University of the Year (年度最優秀スポーツ大学) と称された。また、2012年のロンドンオリンピック・パラリンピックには90人のアスリートが参加した。学部内の研究室に車いす専用のドレッドミルが設置



写真 15



写真 13



写真 16



写真 14



写真 17



写真 13~18 ラフバラ大学演習室の様子



写真 19~20 ラフバラ大学研究室の様子

されており、動作解析や生理・生化学的解析を行うなど障害者スポーツを積極的に支援する体制が見られた。特に外部資金によって設立され、現在も運用されている Peter Harrison Centre for Disability Sport について、施設の説明及び運用の説明を受けた。

4-1. Peter Harrison Centre for Disability Sport

このセンターは、ビッキー・トウフリー博士 (Dr. Vicky Goosey-Tolfrey) 以下、11名のスタッフを雇用し、障害のある人たちのスポーツにおける研究と実践に大きく貢献している。それは、スポーツパフォーマンスと健康と福祉の2つの主な研究指針で構成されている。使命は、パラリンピックのスポーツに関する知識を向上させ、障害者がスポーツや身体活動に参加することで得られる健康と生活の質の向上を促進することであり、このセンターは、

多くのイギリスチームにスポーツ科学のサポートを提供するだけでなく、研究に多大な関わりを持っている。このセンターの責任者であるビッキー・トウフリー博士に施設の説明をしていただいた。

長年にわたり、多くのアスリートに対してハイパフォーマンスサービスを提供してきている。特に、英国車いすバスケットボール協会、英国車いすラグビー協会、英国パラトライアスロン、英国ゴールボール、ハンドサイクル、(切断者、車いす選手)が含まれている。

4-2. School of Sport, Exercise and Health Sciences

スポーツ・運動・健康科学学部は、教育と研究に優れた国際的評価を得ている。ラフバラ大学の優れ



写真 19



写真 21 スポーツ・運動・健康科学学部の棟の前

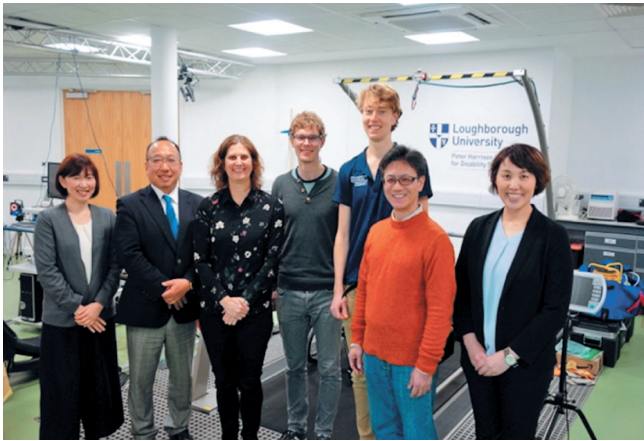


写真 22 集合写真



写真 23 ウースターの街並み

たキャンパスだけでなく、最も先端的な施設や世界的に有名な教員の専門知識にアクセスすることができる。特に日本では見ることの少ない少グループでの実験施設などはスポーツと言うより、医学部に近い施設構成になっていた。

5. ウースター大学訪問について

筆者らは2018年2月19日夕方にウースターに入り、その夜はウースター大学のミック・ドノヴァン(Mick Donovan) 大学副総長、レーバーン・バーバー(Lerverne Barber) スポーツ・運動科学部副学部長らと夕食を共にした。翌20日、ドノヴァン氏の案内で大学を視察したのち、ウースター大学スポーツ・運動科学部及び「障害者スポーツのコーチング科学コース」(Sports Coaching Science with Disability Sport BSc, 以下、障害者スポーツコー

スとする)の説明を受けた。そののち視察者4名が、日本のスポーツ政策、日本のパラリンピック教育、日本福祉大学スポーツ科学部の内容、車いすマラソンに関する研究についてプレゼンテーションを行い、質疑応答するなど交流を行った。

5-1. スポーツ運動科学部・障害者スポーツコーチング科学コース

ウースターはロンドンの北西約160kmに位置する人口約10万人を擁する街である。ウースターシャー州の中心都市で州都である。町の中央にセバーン川が流れ、その河畔にあるウースター大聖堂の澄んだ鐘の音が響き渡る閑静な街である。

ウースター大学にはSt John's, City, Riversideの三つのキャンパスがあり、ウースターのほぼ中心部に街に溶け込むように広がっている。第二次世界大戦後の教員不足に対応するために1946年に設立された大学である。2005年に看護学校などを吸収合併し、総合大学となった。約1万人の学生が在籍し、そのうち2,000人前後が障害学生である。芸術学部、教育学部など8つの部門があり、その一つがスポーツ・運動科学部(Institute of Sport and Exercise Science)である。スポーツ・運動科学部にはクリケットコーチングとマネジメントコースやダンスとその地域実践コース、フットボールビジネス・マネジメントとコーチングコース、アウトドアアドベンチャーリーダーシップとマネジメントコースなど18のコースがあり、学生たちはこれ



図 2

らのコースの一つを集中的に履修するか、二つを組み合わせる。これらのコースの一つに「障害者スポーツコース」がある。

障害者スポーツコースの立ち上げは、学生が教育実習に行った際、普通クラスの中で十分活動できていない障害児のいることを問題視し、体育教員養成カリキュラムの中に対応できる内容の授業の必要性を提案したことに始まる。大学は学生の要望に応え、1999年から障害者スポーツに関する授業を立ち上げた。そして2011年からは一つのコースとなった。こうした内容のコースを設けたのはウースター大学が英国でも初めてである。受講者数は初年度約25名だったのが2015年度には約90名となり、他コースと合わせてこのコースを受講する学生も含めると約310名、2016年は340名であった。

ウースター大学スポーツ・運動科学部は子ども、高齢者、障害者などすべての人を含む「インクルーシブ」を教育理念としており、2017年にはトレーシー・クロウチ (Tracy Crouch) スポーツ大臣から「ウースター大学のインクルーシブの取り組みは世界でも有数である」と称賛されている。ウースター大学におけるインクルーシブスポーツは「PEOPLE FIRST (人間第一主義)」を意味しており、それぞれの人々はそれぞれの置かれた環境の如何にかかわらず、身体活動を行う機会を持つべきであるという考えに基づいている。そして、その中でも障害者スポーツはインクルーシブ実践の中心的なものと位置付けられている。

大学はウースターラグビークラブ、クリケットクラブ、ホッケークラブやボートクラブなど地域の各種スポーツ団体と連携している。また国内プロバスケットボールチームのウースター・ウルヴスとプロネットボールチームはこの大学を拠点としている。大学には照明設備のついたグラウンドやダンススタジオ、2000席を擁するウースター大学アリーナ (体育館) や運動生理学やバイオメカニクス、栄養学などの各種実験室があり、2012年ロンドンオリンピック・パラリンピックの際には事前キャンプ地としても使われた。スポーツ施設の中でもウースター大学アリーナはアクセシビリティのよいスポーツ施設と



写真 24 ウースター大学アリーナ

して高い評価を得ている。

5-2. 障害者スポーツコースのカリキュラム

英国では大学を3年間で卒業する。障害者スポーツコースの1年から3年までの授業カリキュラムは表2のとおりである。英国では一般的に授業のことをモジュール (module) と呼んでいる。モジュールは、週1回、1回の授業が3~4時間、12週で一つの単位となっている。1回の授業3~4時間のうち前半は講義、後半は実技や実習で構成されている。講義は多人数で受講し、その後の実技、実習は少人数に分かれて受講する。また、いくつかの障害者スポーツ関連のモジュールはスポーツ・運動科学部のどのコースにおいても履修できるようになっている。

実習では地域の高齢者、子ども、障害者などに大学へ来てもらい、学生たちがその指導をする形をとっている。筆者らが視察した折にはウースター大学アリーナで障害児、高齢者らが学生の指導の下、スポーツを楽しんでいた。

このほか大学から「ウースターズヌーズレン (障害児者にスヌーズレンプログラムを提供する慈善団体)」や「アルピオン (基金特別な支援を必要とする子どもにサッカープログラムを提供している慈善団体)」など連携している地域のスポーツ団体に学生を派遣して実習を行う形の実習も行われている。

授業の実施方法は違うものの、各種講義とスポーツ実技、スポーツフィールドワークなどの実習をカ

表2 障害者スポーツコースのカリキュラム (ウースター大学 HP を翻訳)

	必修	選択
1年	<ul style="list-style-type: none"> ・インクルーシブスポーツ指導の原則 ・スポーツと運動の基礎 ・アダプテッド身体活動、スポーツと障害 ・スポーツ指導：個人スキル 	<ul style="list-style-type: none"> ・SENDとインクルージョン概論：歴史と法令 ・特別な学習困難：障壁の克服 ・小児期と青年期におけるメンタルヘルス ・語学センター提供の特別授業
2年	<ul style="list-style-type: none"> ・コーチング教育学と実践 ・障害者指導の科学的分析 ・研究方法論 	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツと障害 ・特別支援教育と学校における障害者体育 ・スポーツ指導：対人関係スキル ・グローバルな視点と特殊教育ニーズと障害 ・自閉症スペクトラムの理解 ・語学センター提供の特別授業
3年	<ul style="list-style-type: none"> ・個別研究 ・障害者スポーツ指導及び体育における現代的課題 ・コーチング教育学と実践上級クラス 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導配置と専門的開発（障害者スポーツ） ・実習（障害者指導） ・スポーツにおける子どもの育成 ・国際スポーツ開発とボランティア ・専門的役割とSENDとインクルージョンにおけるコンテキスト ・アイデンティティ、インクルージョンと社会正義 ・実践における支援テクノロジー



写真 25 授業の様子

リキュラムに取り入れている日本福祉大学スポーツ科学部と授業内容や構成に関しては類似したものがある。ただ、大学が資金を出して地域住民に大学に来てもらい実習を行える環境にあるのはうらやましい限りである。

この他ウースター大学ではインクルーシブスポーツや体育を指導する教師のためのプログラムも提供している。これらのプログラムのテキストとして「THE WORCESTER WAY An Inclusive approach to Physical Education and Sport」および「INCLUSIVE ACTIVITY CARD」を作成しインクルーシブアプローチの普及を図っている。

5-3. 大学施設

ウースター大学アリーナ

ウースター大学アリーナは2013年4月に作られた最先端かつアクセシビリティに非常に優れたスポーツ施設である。2,000席の観客席があり、地域のスポーツ大会やここを拠点としているプロバスケットボールチームの試合などにも使われている。ウースター・カウンティ・クリケットクラブやウースター・ウルヴス（プロバスケットボール）、アストン・ヴィラ（プロサッカー）、バーミンガム・シティFCなどのスポーツチームのパフォーマンス分析、体力、



写真 26 アリーナ受付

栄養指導なども行っている。

300人の車いすユーザーが緊急時に安全に避難できる導線を確保したり、障害者用駐車場の充実、車いす利用者も使えるよう器具の設置などアクセシビリティに優れた施設で英国車いすバスケットボール代表チームの拠点にもなっている。建設された年には約70の国内・国際大会を開催し、その約6割がプロバスケットボールなど健常者スポーツの大会、4割が車いすバスケットやボッチャなど障害者スポーツの大会だった。年間50万人が訪れると言われており、建物のコンセプトは本学のSALTOと同じだが、スポーツ科学部完成年次まで学部学生しか使えず、近くに宿泊施設も、観客席もないSALTOとは利用者数は格段に違う。

宿泊施設

キャンパス内に1,000部屋を超える寮がある。車いす利用者の使用が前提となっており、こちらもアクセシビリティがよい。ワンフロアに6つの個人部屋と共同のキッチンがある。キッチンも車いす利用者が使いやすいように、シンクの高さを低くするなど工夫されている。アリーナを使った各種スポーツ大会や合宿などの宿泊施設としても利用される。



写真27 宿泊施設

HIVE (図書館)

大学図書館は地域の共同図書館として約84億円をかけて造られ、2012年に開館した。200万冊の蔵書のほか、学習のためのテクノロジーやスペースが



写真28 HIVE内の様子



写真29 研究交流の様子



写真30 研究交流参加者

大変充実している。1階は幼児や子どもが使えるフロアで少々騒いでもよいということであった。ウースター大学の学生は大学図書館として、学習や研究のために利用するほかに、子どものための読み聞かせの実習や様々な展示スペースとしても利用している。地域住民も同様に学習や研究に利用するほか様々なイベントやパフォーマンスのためのスペースとしても利用する。斬新なデザインと色の建物のため周りの景観とマッチしていないという声も聞かれるそうである。

参考文献

- 1) 杉山 茂・園田 碩哉・上柿 和生 (2016) 「オリンピックは社会に何を遺せるのか」, pp17-23, 創文企画.
- 2) 久木留毅 (2015) 「英国における拠点大学のスポーツ戦略」, pp23-27, 専修大学出版局.
- 3) 吉田直人 (2017) 「ロンドンに根付くパラへのリスペクト熱狂を文化に転換させる仕組みづくり」『sportsnavi』
<https://sports.yahoo.co.jp/column/detail/20170729004-spnavi>, 2018年9月18日閲覧.
- 4) (公財) 笹川スポーツ財団 (2017) 諸外国における障害者のスポーツ環境に関する調査 [イギリス, カナダ, オーストラリア] 報告書.
- 5) Stoke Mandeville Stadium (2018) ホームページ
<https://www.stokemandevillestadium.co.uk/>, 2018年8月26日閲覧.
- 6) Wheel Power (2018) ホームページ
<https://www.wheelpower.org.uk/stoke-mandeville-stadium>, 2018年8月26日閲覧.
- 7) The University of Loughborough (2018) ホームページ
<http://www.lboro.ac.uk/?external>, 2018年5月10日閲覧.
- 8) The University of Worcester (2017) THE WORCESTER WAY-An Inclusive approach to Physical Education and Sport.
- 9) The University of Worcester (2017) INCLUSIVE ACTIVITY CARD, THE WORCESTER WAY- An Inclusive approach to Physical Education and Sport.
- 10) The University of Worcester (2018) ホームページ,
<https://www.worcester.ac.uk/>, 2018年3月10日閲覧.

【付録】

ウースター大学にて日本福祉大学スポーツ科学部を紹介した時の資料

ABOUT NIHON FUKUSHI UNIV.
FACULTY OF SPORT SCIENCES

<http://www.n-fukushi.ac.jp/english/index.html>



Dean, Professor
MOTOAKI FUJITA, Phd.



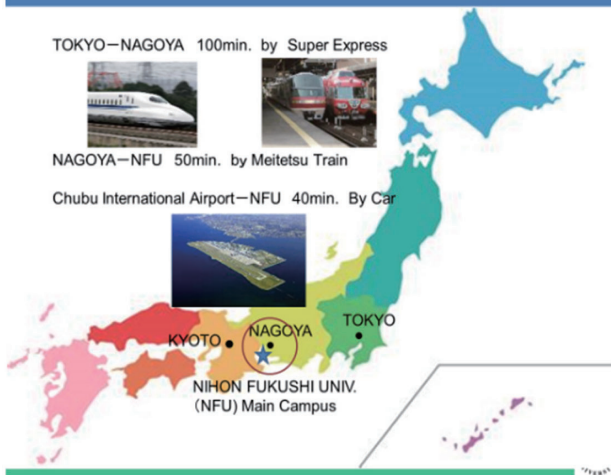
WE HAVE

- 4 Campuses
- 8 Faculties: Faculty of Economics, International Welfare Development, Nursing, Health Science, Social Welfare, Faculty of Child Development, **Sport Sciences** and Healthcare Management
- 229 teachers (Prof.103 Asso.Prof 65 Assi.Prof. 61)
- 11,781 students and 247 graduate students
- About 100 students with disabilities



About Faculty of Sport Sciences

- It was launched in April, 2017
- 22 teachers belong to the faculty
- We have 196 students (only first year students) including 2 students with hearing impairment
- New gymnasium and swimming pool have been built
- Our mission is to realize the society
 - Where everybody can self-actualize,
 - Where people can be healthy and culturally aware
 - Where social security system is sustainable
 } through sport



History

1953	Chubu Junior College of Social Work established. Institute of Social Sciences established (present-day Department of Social Welfare).
1957	Chubu Junior College of Social Work changes its name to Nihon Fukushi University (NFU).
1969	Master's program established at the NFU Graduate School of Social Welfare.
1976	Faculty of Economics established.
1996	Doctorate program established at the NFU Graduate School of Social Welfare.
1998	Support Center for Students with Disabilities established.
2001	NFU Correspondence Education established.
2008	Faculty of Health Science established. Faculty of Child Development established. Faculty of International Welfare Development established.
2015	Faculty of Nursing established.
2017	Faculty of Sports Science, Department of Sport Science newly established.



What we are doing
to achieve our mission

- Research and study sport from various angle
- Improve ability of instructing sport to all people including people with disability
- Acquire ability to work in society (social skill, communication skill and ability of solving problems with teamwork)



Sport facilities



-
- We began to research about uniforms for Paralympians, especially boccia and wheelchair rugby players with a sportswear company
 - We began to support athletes with disabilities in terms of mental, biomechanics and physical fitness
 - We are going to collaborate with Japan wheelchair tennis association
 - We are going to research about Paralympic legacy
 - We expect to be collaborated with each other in terms of research, education, and human relation !



Thank you for listening

